

高・大・一般 漢字（隸書）

石坂 雅彦

楊峴臨禮器碑②



(百) 王 獲 (麟)

楊峴は清朝末期の碑学派として知られるが、浙江省の人で字見山でも馴染まれている。号は庸齋・藐翁などがあり、堂号は遲鴻軒。進士には合格しなかったが、松江府知事などを歴任し、退官後は文墨の世界に浸り自適の生活を送ったという。この自適生活の中でよなく漢碑を禮器碑を愛玩し一家をなしたという。

文学的教養に裏付けられた趣味が生んだ独得の隸書、特に禮器碑は隸書学習には大いに参考になるかと思う。

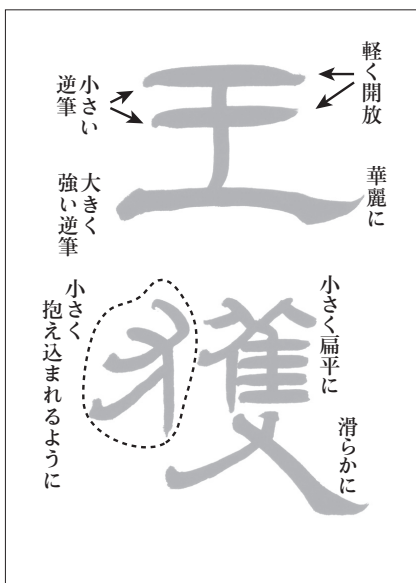
〈今月のワンポイント〉

線の細太や肥瘦、また筆先の動きや働きをよく見たい。装飾性の要因はその辺にあるか。

〈学習上の留意点〉

「王」…太目に豊かな線で書く。上二本の横画は小さな逆筆、長い横画は大きく強い逆筆。波磔は華麗にお洒落に。

「獲」…ケモノヘンを抱え込む構成、脚長の構成に注意。細目の線で伸びやかに。波磔は滑らかに洒落に。



高・大・一般 漢字

新(10級から五段までは作品用紙として画仙紙ハツ切り(68cm×17.5cm)又は、画仙紙半切(136cm×35cm)のみの出品です。六段から八段までは作品用紙として従来通り画仙紙半切(136cm×35cm)のみの出品です。

宮澤 鷺州



※骨書き

臥薪嘗膽

〈釈文〉 臥薪嘗膽(胆)

〈出典〉 『十八史略』

※中国の春秋時代の歴史書

〈意味〉 「臥薪」は「硬い薪の上に寝ること」、「嘗胆」は「苦い肝をなめること」で、「目標を達成するために苦心して努力を重ねること」という意味。四字熟語としてよく使われる言葉です。

〈解説〉

コロナ禍や戦争等によって、私達は今、我慢を強いられている状況にあります。しかし、苦

難の中にあっても希望を持ち、強い気持ちで前進したいという「ねがい」をもって今回撰文しました。

書体は楷書に近い行書で書きました。用いた筆は、唐筆(上海工藝の「大號蓋峰」)です。五十年前から愛用しているために筆毛が摩耗し、すぐに筆割れが起りますが、それを活かした線の変化を楽しみとしています。

一字目「臥」は、「起承転結」の「起」に当たるので強いインパクトが必要と考え、豊かな墨量を頼みに筆圧を強く、一気呵成に運筆しま

した。二つの縦画が同質になったことは反省点ですが、卒意的(心のままに自由に書いた)であれば仕方ないことと解釈します。

二・三字目は筆の割れが生じたので、静かに運筆して線が浮かないよう配慮しました。特に「嘗」の最後(甘)は、筆が三方に独立して開いたので奇妙な線が出現しました。四字目の「胆」ではわずかに墨継ぎをして上の三字を支えるべく字形の安定を図りました。

なお、一字一字の意味を噛みしめるという意味で、各字の最終画は次字への気脈を抑え、「止め」としました。

筆路がわかりにくいので、骨書きを示しました。創作意図を明確にして、試行錯誤を繰り返しながら、書作を楽しんでください。